「今日の説教、聴き手のために」　(講壇-13)　2015/3/15 明治学院教会

『勘定済み』　　岩井健作（前牧師）

聖書　マルコ１４章３２節－４２節　「もうこれでいい」(41 節)

1、画家渡辺総一氏は抽象画的に「ゲツセマネの園での祈り」を描きました。写実的な小磯良平氏の「ゲッセマネの祈り」とは対照的です。しかし構図はよく似ています。「地に臥して祈るイエス」「眠れる三人の弟子」「神を象徴する光」「深閑とした風景」。渡辺さんは、ゲッセマネがオリーブを絞るという意味があるのに重ねて、オリーブの木を三本図案化し、朱色のコップ・ブドウ酒を配し、暗に「贖罪」をテーマにしています。「汗が血の滴るように」（ルカ 22:44 のみ）を思わせ、神学的です。小磯さんのイエスは天を仰いで、「アッバ」（お父さん［マルコのみ]）と祈ってます。

2、物語の前半のテーマは「弟子達の無理解」です。祈りの伴走者であるはずの弟子ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、は「目を覚ましていなさい」との促しにも拘らず眠ってしまいます。「心は燃えても、肉体は弱い」。何度もイエスに従うと告白をしながら、挫折をするあの古い人格は「シモン」（マルコのみ）と呼ばれています。イエスの　「眠っているのか」(37) との疑問文は叱責を含んでいます。弟子の無理解はマルコ福音書の一貫したたテーマです。三回にわたる（8 章以下）受難予告を、弟子たちは理解していません。このゲッセマネでもイエスは三回弟子たちに問いかけます。**「御心に適うことが行われますように。」**（３６）が究極の祈りであることは言うまでもありません。「祈り」とは此の事なのです。

3、物語の後半は、イエスの弟子たちへの「愛と赦し」が示されています。41 節では、「眠っている」と事実だけが述べられ、イエスの弟子たちの有りのままの姿への受容が示されます。このゲッセマネでのメッセージの一つを、ここに読み取ることは大いなる慰めです。ここには、十字架の死に向うイエスの内面の厳しさとは対照的に弟子たちへの赦しと受容がにじみ出ています。「心は燃えても、肉体は弱い」と。

4、決定的なのは「もうこれでいい。時が来た。・・立て、行こう」という言葉です。「もうこれでいい。（アペケイ）」は、元来は商業用語で、「支払い済み、勘定は済んでいる」という意味です。イエスは眠る弟子に「祈りの勘定はもう済んでいる」と語ります。祈れないことへの執り成しでります。「受難」というテーマでイエスを５４の連作を描いたのは画家ジョルジュ・ルーオーです。そのイエスは、厳しさと、慈しみが二重に描かれているような作品です。「裁き」と「赦し」は二律背反です。しかしイエスの慈しみには、この二重性が秘められています。「わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる」（ローマ 8:26）とのパウロの言葉を想起させます。弟子は眠りながらもなお「立て、行こう」と十字架の道行きに一緒に行くように招かれています。ペトロ、あの挫折せるものにも、なお招きが、と思うと慰め深い出来事です。

5、讃美歌２１－６０「どんなに小さい小鳥でも」は菅千代さんの詩です。彼女とは京都で CS 教師を一緒にいたしました。菅隆志牧師夫人として仙台で良い働きをされました。「よい子になれない」。とてもいい言葉だと思っています。ある教会に赴任した時、初めてお会いした方の挨拶がとても印象的でした。「私いい信者じゃあ、ありませんよ」。でも、言葉とは裏腹に、終始教会の縁の下の力持、社会では目立たない「反戦平和」への奉仕を、持続してなさっておられました。「支払い済み」の愛を内に秘めた生き方が、右傾化する日本での「キリスト者」の働きです。